



通信

No.60

2017年 早春号

発行：子育てサポートくるみ

住所：羽曳野市壺井 508-1 TEL：072-957-3282

FAX：072-958-4089 HP：<http://kosodate-kurumi.com>

子どもも大人も楽しい「リズムあそび」で育つ

自然豊かな壺井の地に移転して、広い園庭と広いホールの園舎での保育をはじめて26年となります。5年前には園庭南側の竹やぶの土地を借りることができ、どの部屋からも園庭が見渡せ、すぐに遊びに出ていけるようになり、本当にたくさんの方々のおかげで、心地よい環境となってきています。

子どもが育つためには、「環境」がとても大切と齋藤公子氏(さくら・さくらんぼ保育園創設者・埼玉県深谷市)から学び、実践してきています。もうひとつ、保育の中心に据えているのは「リズムあそび」です。

リズムあそび —2016年保育カレンダーより—

さくら・さくらんぼ保育園のリズムあそびは、かつてアメリカで行われていた「律動」と戸倉ハル氏の考案による「自由表現・集団あそび」、小林宗作氏から学ぶことのできたダルクローズの創案した「リトミック」の三つを原型にしています。さらに齋藤公子氏は、自然界の生物進化発展の法則に則ってリズムあそびを創造発展させました。

子どもは絶えまない自発的な運動の中で、自らを育てていきます。リズムあそびを行う時は、乳児期からの模倣する力を大事にします。また子どもの体の自然をよく観察し、決して無理をさせないように配慮します。

齋藤公子氏は「0歳から6歳までの運動は、単に身体づくりが目的ではなく、脳の発達のためつまり知的発達のために大変重要なものとして位置付けられている。それは、運動神経は感覚神経とともに脳中枢でつながり、両神経の発達が脳中枢の発達を促すからである。しかも就学前の6年間は、その脳中枢のもっとも発達する時期であり、6歳までで大人の90%に達すると言われている。触覚、視覚などの感覚神経と、手や足などを動かす各運動神経を発達させることが、就学を可能にする脳の発達を促す土台になる」と述べられています。

リズムあそびは、“心も身体も育つもの”という位置づけで、楽しみながら毎日子ども達と行っています。この園舎ができるまでは齋藤公子氏が直接くるみに来てくださり、保育講座を開いたり、親たちと、さくら・さくらんぼ保育園に出かけ学んだりすることもありました。保育者はもちろん、親たちもリズムあそびをする体験を通し、身体で学ぶことができました。私たち保育者は、齋藤先生から「子どもにリズムあそびをやらせるのではなく一緒にする」「大人はお手本の存在で年長のリズムはできるようになること」と教えられました。そんなリズムあそびを、くるみの親と一緒にいう機会が減ってきたことに気付いたのは、昨年度の運動会でした。ピアノの音に身体が反応していない親の姿から、今年度は「親子リズム」を例年より多く年間予定に取り入れることにしました。身体で学ぶこと、日頃、子ども達がこのリズムあそびでどれだけ身体と頭(考えて動く)を使っているかを親も体験してほしいと、意図的に取り組みました。親子で共感し楽しみ、一所懸命にリズムの動きに向かうことでお互いに感じるものがあったと思います。そうして迎えた今年度の運動会での大人の姿は違っていました。身体を通して学ぶことは本当に大切なことと私自身も感じます。リス

ムあそびで身体を動かしていると自分の身体の動きがどうなっているか、どこをどう使っているのかを考えたり、知ることができたり本当に深いものです。子どもが育つためにとっても大事な「リズムあそび」ですが、大人にとっても大変意味のあるものだと感じています。くるみの中で親も一緒にやり続けていこうと思います。

園長 山田 房江

くるみに出会って…

僕が“くるみ”に出会ったのは大学2回生の就職活動の時でした。

今までに行った保育園・幼稚園の実習やボランティアでは、早期教育や習い事などに取り組んでいるところが多かったので、“くるみ”に出会った時は驚きました。

まず僕が思ったのは、本当に自由に遊んでいること、そして、自然と触れ合って遊んでいることです。今まで見てきた保育とはかけ離れた保育で、子どもたちも本当にいきいきと楽しそうに遊んでいました。“こんな自然豊かなところで子どもたちと一緒に遊びたい”と思い、くるみに就職しました。

働き始めてからも、服の汚れを気にせず頭の先から足の先まで全身泥んこになって遊ぶダイナミックさに驚きました。また外遊びで使うおもちゃは、プラスチックのものが一切なく、木製のものや鉄のフライパンや鍋などを使っていて、純粋にすごいなと思いました。(最近では、怪我をしないように保育園でのおもちゃはプラスチックのものが主流になっていると聞きます。)

散歩では、山道や山の中を駆け回り、自然が遊具となっていました。斜面を登ったり滑ったり、山菜を採って食べたりと、全身で自然を感じて触れて遊ぶことが子どもの感性を育てているのだと感じました。

また、全身泥んこになるまで遊び、山の中でもしっかりと散歩できるのは、くるみの食事があってのことだと思いました。

最初、くるみの食事には衝撃を受けました。くるみの食事は、加工食品などを使わず、素材を大切に、野菜中心のバランスの取れた食事です。おやつも市販品ではなく、手作りです。子どもたちが野菜を美味しそうに食べている姿やぱくぱく食べる量を見てすごいなと思いました。

僕自身子どもの頃から野菜が苦手で、学生時代一人暮らしを始めてからも、インスタント食品やファーストフードをよく食べていました。働き出した当初、野菜中心で味付けも薄く、歯ごたえのある食事に戸惑いました。くるみの食事を食べ続けて5年、苦手だった野菜を家でも調理して、気持ちよく食べられるようになりました。“食べる意欲は生きる意欲”の言葉通り、子どもも大人も元気でいられるのは食事のおかげだと実感しています。

今の時代にこんな自然あふれる環境で保育ができるということは、子どもの本来の力を伸ばしてあげられると僕は思います。子どもの成長を見ることができるとともに、子どもの育ちに関わることで自分自身も成長できていると感じます。くるみで見たこと、感じたこと、学んだことをこれからもしっかりと活かしていきたいです。

保育士 山田 和幹



[運動会のひとコマ・年長の荒馬]

保護者の声

○ 運動会を通して感じたこと (井指 良江)

「やった～！綱引き3連勝やで！！」と勝ち誇る娘と「最後の運動会なのに、なんで3連敗やねん・・・」と肩を落とす親2人。今年の運動会は、久々の綱引きがありました。

ここ数年、学童 VS 保護者チームで行われていたリレーが、今回は学童 VS 職員チームだったり、借り物競争があったり。いつになくプログラムが違うな・・・と思っていたら、実は学童の子ども達のアイデアだったのです。いつもは運動会前に何を聞いても「別に～」とか「知らん」と、そっけない娘が今年は珍しく練習の時から熱いな・・・？と感じていた理由はそれだったのか！！と腑に落ちました。

言われたことをただやるのではなく、自分たちでやりたいと言ったことを取りあげてもらい、みんなで実現できた嬉しさがそこにあったのだろうと感じました。言うは易し、行方は難し・・・準備にかけられる限られた時間の中で、子ども達のことをくみ取り準備をするのは本当に大変なものと容易に想像がつかず。それをまあいいかと流さず、本気で共に取り組んでくれる職員・保護者がいる、本当にありがたいことだなあと感謝でした。

これは運動会に限らず、学童の活動日、お楽しみ会、日常の遊びにおいても同じこと。はみ出てはいけない一番外側の枠組みは大人が決めるものの、あとは可能な限り自分たちの力でやってみること、それが許される環境は、今なかなかないのではないのでしょうか。

また、運動会でもう一つ印象的なことといえば、子どもを応援する大人達の顔です。わが子が出ていなくても赤ちゃんのリズムに目を細め、友達のお母ちゃんが娘のリレーに本気でドキドキしてくれ、祖父母は、たとえ孫でなくても1人の男の子が1年で大きく成長したことに驚く。強制されたわけではないのに「みんなでみんなの子を育てる」という空気が流れている、私はそれが好きでした。

ただ、くるみに来て最初のころは、この運動会の空気感＝良いもの、それ以外＝良くないもの、という考えに陥りそうになり、他の運動会を批判的に思う時期もありました。でも小学校に入ってみれば、そこにはその素晴らしい点があり、良い悪いの問題でなくそれぞれの場所で頑張ればよいという着地点を見つけることができました。

ふと、わが子の6年間を振り返れば、「異なる環境で育ってきた学校の友達との違いに戸惑った低学年」、「女子特有の関わりにうんざりした中学年」、「常にトゲトゲしていた高学年」を経て、6年生の最後には、時々すっきりした顔を見せるようになりました。(とは言っても、まだ何か憑き物に取りつかれるような時もありますが) なんだか親子で同じような道を歩んでいるなあと、苦笑いしてしまいます。

6年生で落ち着くために頑張るのではなく、どの時点であれ「結果そうなる」という経験を重ねていくことが大切なのかな、この先も皿の時間はほんの少して、また違う景色が待ち受けているのだと覚悟はしておこう、と自分に言い聞かせています。そして、酸欠になったらくるみの空気を吸いに戻ってきますので、どうかこの場所がどんな形であれ、この空気感を残したままずっと続いていきますように。



[運動会のひとコマ・学童の6人7脚]

○親子でピンチをチャンスに (小川 尚)

我が家がくるみの運動会に参加するのは6回目です。毎年、我が子の成長をリズムや走る姿で見ることができ、とても嬉しい一日です。親も子ども園の生活に慣れてきた近年は、他の園児や学童児の活躍も嬉しく見させていただけようになりました。

さて、今年の運動会は、昨年までとは少し変わった気持ちで臨むことになりました。長男が卒園し、学童の仲間入りとなったのです。学童の座席で座っている姿は何か大人っぽく見え、親としてはなぜかこそばゆい、不思議な気持ちになりました。そんな長男は、運動や球技は好きで、得意分野です。年長までは、運動会で初めて取り組むことでも、体を動かすことに関しては、苦勞することなくこなし、運動会に出ることも全く抵抗はありませんでした。しかし、今年の運動会は、本番が近づくにつれ、「もう、出たくない。」と言うようになったのです。今までそんなことを言ったことがなかったのに、おかしいなあ…と思ってわけを聞いてみると、学童競技の一輪車に乗れないことが理由でした。「じゃあ、練習しなさい！」と簡単に言い放つ私の言葉の裏で、当時は色々な気持ちと戦っていたんだなあ、と思います。

《乗りたいけど、思うようにできない。班長さんが声をかけてくれているのに、他の遊びを優先してしまう。家にあっただけなのに…と安易な方法を考える。》あれやこれやと、気持ちを吐き出していました。さて、本番はどうなるのかな？

運動会当日、いつもとは違う雰囲気緊張している次男と、心すっきりしない長男を連れて、園へ向かいました。次男は、お友達とにこにこしながら園庭を走っていましたが、やはり緊張が勝り、リズムは楽しめたのかどうなのか、この場から逃げ出したい様子も伺え、でも最後までみんなとやりきりました。そして長男の出番の学童競技です。一輪車は最初の競技。なんと、一輪車に乗った長男の左側に一人、右側に一人、そして後ろ側にも一人、計3人の上級生がついてくれているのです。その光景に、感動で胸がいっぱいになりました。チーム対抗のため、乗れない長男は足を引っぱる存在にも関わらず、上級生たちは見捨てずに、きっと色々策を練って助けてくれたんだなあと思えました。感謝の気持ちでいっぱいです。

一緒に見ていた母も、「〇〇（長男）にとって、できないことから入るのも、いい経験だね。」と言ってくれました。困難なことにぶつかった時に乗り越えようと努力することであったり、一人では乗り越えられない困難な時は、同じ目的に向かって共に努力する仲間がいれば励みになったり、できない子の気持ちが分かっていたり、長男にはとても必要な経験だったのです。

「理屈ではなく、経験が大切」とくるみでは教えていただきますが、4月からの学童生活で、本当に素晴らしい経験をさせてもらっているんだなあ、と改めて思います。1年生から6年生までの縦のつながりがあり、体や言葉でぶつかり合ったり、色々な立場でその時の気持ちを感じたり、自分の思い通りにはいかないこともいっぱいです。今の学校現場や、ご近所だけでは、なかなか経験できない集団生活です。学校や学童生活においては、困ったことがあったら言ってね、というスタンスで本人に任せていますが、助けを求めてきた時に、一緒に考えて進んであげられるよう、私たち親も色々な経験を積み重ねなければならないなあ、と思います。

今年の運動会も、みんなが笑っていました。借り物競争やパン食い競争など、懐かしい競技で会場が一つになることもありました。競技する者も楽しんでやっていたし、その一生懸命さに見ている者も心を動かされる場面がたくさんありました。学童の年頃のお兄ちゃんお姉ちゃんたちが、小さい子の走りを応援する姿も、とても微笑ましかったです。

来年の運動会は、どんな出来事が待っているのでしょうか。果たして長男は、一歩前へ進むのでしょうか。